

村井健祐先生を偲んで

麻布大学教授 田之内 厚三

1. 社会心理学懇話会と川柳

〈ガングロも花買うのかや成人式〉

この句は、村井先生がまだご病気に気づかれていない平成13年2月下旬に詠まれた川柳です。私たちは、約2カ月に1回の割合で社会心理学懇話会という集まりを持っていました。この会は1996年の2月に村井先生を中心に発足しましたが、その主旨は、社会心理学だけではなく、心理学的な話題全般について自由に語り合うというものです。したがって、参加される方たちも毎回多方面にわたっており、小中学校の教員、地域住民、主婦と、多士済々であります。そして、研究発表の後には、近く中華料理店で会食というのが定番になっておりまして、そこで披露されたのが冒頭の川柳です。村井先生の発案で、会食への参加者には川柳の作句が義務づけられ、それがだれの句なのかをみんなで当てた上で、ベスト3を選ぶというのが恒例となっていました。何かそうした興味にも先生の心理学的発想がうかがえ、当初は苦笑したことを覚えています。ところが、その夜に限っては冒頭の川柳が先生の作であるということをお願いした者は一人もいません。それほど作風がこれまでのと違っていたのです。村井先生のお人柄をご存じの方だと、先生がこのような川柳をお作りになるとは思われません。それまでは、どちらかといえば風刺や皮肉が強烈で、わりと先生の句は当てやすかったのですが、この頃からでしょうか、内容に滑稽味が加わり、ひとりでは頬がゆるんできるとようなユーモアある作品が増えてきたのです。

その後、5月の連休明けの再検診で肺ガンであることがわかり、7月1日に入院ということになるのですが、その間も社会心理学懇話会にご病気の素振

りもみせず出席され、川柳作句にもますます磨きがかかってこられたのです。

2. 産業・組織心理の研究から災害心理研究へ

先生は、平成13年10月1日午後7時15分、ご自宅で奥様やご長男、ご次男に看取られ、静かに息を引きとられました。享年65歳の若さでありました。

先生は、昭和11年4月21日、5人兄弟の4男として盛岡市にお生まれになりました。村井家の祖先は、父方は大富豪、母方は大地主で、村井弥兵衛といえはかつては盛岡市で知らない者はいないほどの著名な財界人であったということですが、そうした恵まれた家庭環境の中で、先生は岩手高校に入学され、水泳一筋のバンカラススタイルを通されたそうです。お兄様も水泳をなさっていたことから岩手県水泳連盟とも深い関わりがあり、当地で大きな大会やイベントがあると、心理学科卒業の岩崎恭子さん（バルセロナオリンピック・女子200m平泳ぎ金メダル）と一緒に帰省されることもありました。昭和32年、日本大学文理学部心理学科に進まれ、36年に大学院に進学されました。昭和41年、心理学科の助手に採用され、43年に講師となられ、産業・組織心理学関係の科目を担当されました。

最初の頃は、組織や経営における動機づけ、集団凝集性の問題に関心を持たれ（『動機づけと人間観の心理学』単著、白桃書房、1974）、とくに企業組織の帰属意識研究に精力的に取り組まれておりました（“企業組織における帰属意識の一研究”日本大学人文科学研究所紀要21, 1978）。この関係で、お亡くなりになるまで産業組織心理学会の理事もなされておりました。1985年頃からは、極限状況における人間行動の研究に関心が移られ、1986年には社会心理学研究第1巻第2号に“極限心理の体系化を”

という論文をお書きになられています。続いて、極限体験と異常行動、日本人の災害観、災害時の避難行動に関する一連の研究を発表され、これらの成果をベースに1995年4月には、日本で初めて文理学部に本格的な〈災害心理学〉を開講されました。この授業では、いままでに発生した災害の調査・分析結果をビデオや写真、テープなどで検討すると共に、災害活動をしてきた学生の体験談を報告させるなど、ユニークな講義を展開されておりました。

とくに近年、力を入れておられたのは、災害救助者の惨事ストレス対策でした。欧米の各消防本部を視察された後、その最初の提言は、“職業的災害救助者のCIS”（日本大学人文科学研究所紀要51, 1996）にみることができます。一方、先生は、東京消防庁人事部健康管理室が惨事ストレスに関する委員会を設置する際にも助言・指導され、その後も、実態調査の実施、デブリーファの養成研修にも立ち会われ、2000年1月には先生の監修による『惨事ストレス対策の手引き』が策定されるに至りました。こうした研究成果は、『心の健康トゥデイ』（共著、啓明出版、1996）や『応用心理学の現在』（編著、北樹出版、2001）にまとめられています。これらに『社会心理学へのアプローチ』（編著、北樹出版、2000）を加えた3冊は、最近の先生の代表的な著書であります。もし、先生がこれからもお元気でしたら、これらの本は、ご自身がこれから目指す研究の方向性を色濃く示す道標となるものであったに違いありません。2001年9月26日には、災害従事者の惨事ストレスケア制度を国内で先駆けて導入するに多大な貢献をされたということで、東京消防庁より、先生に対して感謝状と副賞が贈呈されております。

3. 日本応用心理学会のこと

昔から、日本大学文理学部心理学科は応用心理学会とご縁が深く、村井先生もお亡くなりになるまで常任理事としてご活躍されておりました。昭和58年～63年までは事務局長を務められ、平成2年からは応用心理学研究の編集委員や編集委員長を歴任されてきました。とくに、1998年発行の『日本応用心理学会史』の編纂にあたっては、各方面に呼びかけて埋もれていた貴重な資料を発掘・蒐集され、内容の充実した読みごたえのある学会史づくりに貢

献されましたが、このお仕事は、先生の面目躍如といっても過言ではありません。

こうしたことから、先生は毎年開催される学会には欠かさず参加されておりましたが、とりわけ10年ぶりに盛岡が会場となる平成13年9月の第68回大会（岩手県立大学）をととても楽しみにされておりました。また、9日に開催される公開シンポジウム「大規模自然災害が起こった時—災害心理学はどう関わる—」の企画・司会も担当されていたので、その準備にも余念がありませんでした。ところが、このご病気です。先生は9月のギリギリの時点まで行かれるつもりでしたが、もう体力がありません。結局、先生のご要望で私が司会を務めることになりましたが、そのときのお気持はいかばかりか、いまとなっては推測するしかありません。

忘れられないのは、懇親会のときです。菊池章夫先生がご挨拶に立たれました。そして、次のようなことをおっしゃったのです。「岩手県では3人の大心理学者を輩出している。お一人は小保内虎夫先生、もうお一人が島田一男先生、そして、三人目が村井の健ちゃんだ」と。私は、帰ってきて、ご病床の先生にこのお話をしたところ、先生は、「そうか、そんなことをいつてくれたのか……」とポツリとつぶやかれ、目頭を熱くされておりました。長いお付き合いをさせていただいた中で、先生が涙をみせられたのは、後にも先にもこのときが初めてのことでした。

4. 健康のこと

どなたもご存じのように、先生は人一倍健康に気をつけられていました。タバコはもちろん喫いませし、ビールも一杯程度で顔が赤くなられるほどでした。肉はほとんど食わず、もっぱら新鮮な魚介類や自然の野菜が好物でした。お亡くなりになった後、ご自宅の書棚からは、自然食品をベースにしたレシピの切り抜きやメモ帳、料理の本や健康の本が山のように出てきました。これほどに健康に留意されていたのに、入院されて3カ月で逝かれてしまうとは、本当に人が持つて生まれた運命の定めみたいなものを感じずにはおれません。「△△の煙が悪かったのかな？」などと軽口もたたいておられましたが、先生ご自身はきつと、納得がいけないという思いではなかったでしょう。

平成 13 年 12 月 8 日には、教え子が集まり偲ぶ会が開かれました。村井先生らしく簡素ではあるけれど、豊かな心に満ちあふれたひとときでした。そのとき、生前、先生がしたためられた「みなさまへのお別れの言葉」がご披露されましたので、ご遺族の

了解を得て、ここにご紹介し、追悼の文とさせていただきます。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。

(平成 13 年 12 月 20 日記)

冠 省

これまで、幼い頃から今日まで多くのかたがたと、それぞれに関係を結ばせていただき有難うございました。

65 歳というみずから知ることのできなかった寿命のなかで、私としてはまずまずの人生ではなかったかと考えております。これにお力をお貸し下さったかたがたに感謝申し上げます。

振り返れば、良い思い出、楽しい思い出のほうがはるかに多い幸せな人生でした。

どうか、随所随所で思い出していただければ幸いです。

皆様ほんとうに有難うございました。

早 々

(原文のまま)